全道展機関紙 "ZEN" 第4号 昭和55年5月20日発行
発行所 全道美術協会 事務局 札幌市南区澄川6条12丁目
渡会純价方 T 011 (581) 2528
印 刷 中西印刷株式会社 011 (781) 7501
編集委員 伊藤 寿朗 岸本 裕躬 斎藤 洪人
坂口 清一 山口 惣市 佐藤 靖

ZEN 全道展機関紙 NO. 4

35周年記念 全道展作品公募

搬入 8月9日(土)10日(日)札通ホール (札幌市中央区北10西17 国鉄桑園駅前)
会期 8月28日(木)〜9月7日(日) 北海道立近代美術館
全道美術協会・北海道新聞社

大きさ、点数制限なし、但し絵画作品のうち1点は必ず60号以下であること。(1点出品の場合は60号以下)、会友も準ずる。

35周年記念 全道展にむけて

事務局長 渡会純价

一九八〇年代は〝地方の時代〟とかいわれているが、美術界も個性の復権として躍如としているのだろうか。地方という言葉にも判然としない響きはあるが、二割の道外作家(会員)を有し、中央画壇で活躍する作家の多い全道展は、ひとつ凛とした在野精神をもつ公募展と思う。

私も全道展を中心に揉まれ育てられた一人だが、三十五周年を迎えるこの時に、事務局長なる大役を引受けることになった。時代の趨勢とはいえ、歴代の名事務局長、本田明二、栃内忠男、砂田友治、竹内豊各諸先輩の後だけに非才な私には今更ながら重責を痛感しており、諸般各位のご協力を切にお願いしたい。

35周年記念賞

会期は標題の通り八月二十八日(木)から九月七日(日)まで北海道立近代美術館にて開催される。例年開催期は六月であったが、種々の事情により八月となり、今後も八月前後が恒例化されるであろう。

三十五回を記念し、企画を組まれているが最高賞に35周年記念賞が設けられたので果敢にアタックして頂きたい。尚、今年度より賞を大幅に改め、従来の全道美術協会賞、北海道新聞社賞に次いで、佳作賞(2)奨励賞(10)と簡単なものとし、外部からの賞は全て辞退することになった。

応募要領

会場の狭隘からくる厳選は年毎に増しているのは誠に辛いことである。今や一般入選作より会員、会友の作品が多い。昨年から改正された絵画部門の出品作の中に六十号以下を一点必ず加えることは、今後共続けられるので充分承知して頂きたい。これは単に大きさで壁面確保するものではなく、作家の力量をもみる上で出品願う訳で制作意欲を抑圧するものではないことは本紙一号で詳述した通りである。

今回より工芸部門の立体作品は、60×60×150cm以内、重量100kg以内、壁面使用は100号以内の制限が設けられた。

搬入場所の変更

馴れ親しんだ札幌市民会館の搬入会場も手狭になってきたので、今年から札通ホールを使用することになった。札通ホールは都心から離れているが国鉄桑園駅前にあり一見出来る判りやすい場所である。会場は広く、大型エレベーターも備えてあり移動も容易となろう。審査も同ホールで行われる。

関連企画

好評の図録は、今年も会員の作品はもとより、会友、一般入選作全部を掲載し、34回展図録より見易いものとすべく着想を練っている。搬入から会期まで日時を要するのも、この間の事情による。

今年度の授賞式は、道立近代美術館の講堂で行い、つづいて講演と映画の催しを予定している。

恒例となった巡回展は、年毎に開催地も増し重要な事業となっているので、各地区と緊密にし充実した巡回展となるべく検討されている。

全道展は開催にむけて着々と準備が進められているので奮って制作に精進して頂きたい。

●新事務局紹介

事務局長 渡会純价
次長 嵐 玲子
●企画委員長、伏木田光夫、委員、本田明二、栃内忠男、竹内豊、尾崎志郎、長谷川忠男、●編集委員長、斎藤洪人、委員、山口惣市、坂口清一・全道展事務局／061(21)札幌市南区澄川6条12丁目、渡会純价方、T011(581)2528・北海道開社事業局文化部全道展係／060(91)札幌市中央区大通西3、T011(221)2111(代)

追悼

本郷さん安らかに

本田明二

今年の一月二十四日、東京日本橋の高島屋で、私にとってはじめての東京個展が開かれた。先輩友人が沢山オープニングパーティに集ってくれた。

パーティが始まる三十分ほど前に、本郷さんがご子息夫妻に両側から支えられながら会場に現われた。

在りし日の本郷さん、自宅療養の頃

「君のために一席ぶつ」と言っていたが体の様子から見て、それが実現するとは思っていなかった私は、杖をついた本郷さんを見てジーンと胸が熱くなった。勿論会場も本郷さんの口ききで借りられたのだし、個展のために一文も寄せてくれた。

「いい展覧会になったね」頼りない後輩の展覧会を、最後まで心配していてくれた温かみが、握りしめた手にひしひしと伝わって来た。杖にすがりながら「一席ぶつ」と言ってくれた姿は、いつまでも私の網膜に焼きついていることだろう。

本郷さんの一生は、彫刻ただひとすじであった。会うたびに新しい作品のデッサンを見せてくれた。病気になってからも彫刻のことをただひたすらに考えていた。春になったら粘土で出来るようになる、と信じ何枚ものデッサンを描いていた。夢と現実の境をさまよいながら、病床で空に粘土をひねる手つきをしていた。あの手にもう一度粘土を握らせたかったのに——

本郷さんはこよなく北海道を愛し、札幌を愛した人である。借金をして宮の森に家を建てたのも、自分の美術館にしようと考えていたからに他ならない。生前財団法人という形で美術館にしようという構想がまとまった。道も札幌市も協力することになり、着々と準備が進んでいる。本郷さんは日本中に沢山のモニュマンを作った。今、本郷新彫刻記念館として、彫刻家本郷新のモニュマンが出来ようとしている。本郷さんが愛した札幌に、本郷新のすべてを集めた記念館としたいものである。

二月十三日本郷さんは不帰の人となった。アトリエで密葬が行われ、二月二十四日青山葬場で、新制作協会葬として告別式が行われた。友人の佐藤忠良さんが委員長をつとめた。

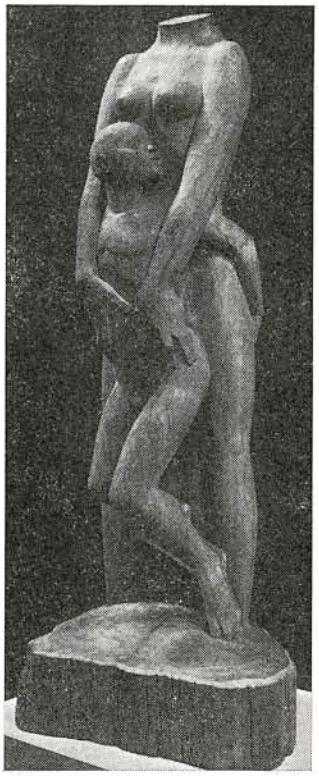
祭典は白布がはりめぐらされ、中央に写真、その前には彫塑台に置かれた遺骨。右手に北海道から二年ほど前もっていった、くるみの丸太が二本立てられ、その前に去年の作品である二米ほどの「魚を抱く女」のブロンズ像。左手に、友人の西さんが作った本郷新像。簡素だが大彫刻家にふさわしい祭壇であった。全道展を代表して田中忠雄さんが弔辞を読まれた。ベートーベンの葬送行進曲が厳かに、弦楽合奏で奏でられる中を千人を越す人々が白いカーネーションを捧げて最後のわかれを惜んだ。

「なんだか胸の中にポッカリ穴があいたようだな」と告別式が終ったあと、佐藤忠良さんがぽつりとつぶやいた。思いは皆同じであった。

楽しみにしていた美術館と、「彫刻の美」の改定版を見ることが出来なかったことが残念でならない。

本郷さん。安らかにお眠りください。

顔のない母子像 1978年



●35周年記念全道展授賞者表彰式並びに講演と映画の会。8月30日（土）於北海道立近代美術館
講演「本郷新を語る」本田明二会員，映画「創る・本郷新の世界」他外国映画1本，入場無料

住所呼称変更と転居

工藤善蔵 〒050室蘭市知利別町3丁目15番13号
竹内昭吾 〒201東京都狛江市和泉本町4〜7、38〜408
大友一夫 〒055（01）沙流郡平取町字川向91〜6
大高操 〒050と訂正
福岡幸一 〒061（21）札幌市南区常盤20番地、82
藤島清士 〒003札幌市白石区栄通11丁目2〜7
宮原ミユキ 〒061（21）札幌市南区川沿1条4丁目115〜62、T001
鈴木善公 〒063（51）1
苫小牧市日新町6丁目10〜18
伊藤啓子 〒001札幌市北区新琴似6条11丁目1〜19
田崎謙一 〒329（32）栃木県那須郡那須町大字大島726、那須国際モビレ1ジ
諏訪田勝衛 〒067江別市上江別西町39の5
玉村拓也 〒063札幌市西区八軒6条東1丁目1〜8
松島正幸 PALAIS GOTHIQUE 6 RUE DE LA MARNE 06400 CANNES FRANCE
久保田実 〒059（24）新冠郡新冠町字東町
池谷虎一 T013（26）7848
後藤庸也 〒063札幌市西区山の手3条10丁目、T011（631）1602
神田比呂子 〒070旭川市高砂台5丁目1の112
高木美智男・順子 〒061（22）札幌市南区簾舞325〜307、T011（596）3696
川本ヤスヒロ 〒064札幌市中央区南14条西19丁目、T011（561）2723
小野健寿 〒061（01）札幌市豊平区月寒東4条18丁目13の4号
田中康彦 〒049（11）上磯郡知内町字重内31の140、T0139（5）6286
黒田栄一 〒192（01）八王子市下恩方町1644〜15
羽山準一、改名 羽山欣周
近藤隆志 〒042函館市西旭岡町2丁目37〜7、T013（50）3023

わが思索と行動

The Family 1975

彫る

伊藤寿朗

木を彫り始めてかれこれ十二、三年になるでしょうか。初めての出会いは、強烈で感動的でした。

大学に入学して一週間、大学の研究室前の廊下で、先輩が斧を振っていました。

シャツ一枚でガツガツと力強い音をたてて、流れている汗がキラキラ輝いて、今思い出してもゾクゾクします。

しかし、不思議な事ですが、今になって、その人の彫っていた作品はと考えると人体のポーズすら思い出せないのです。つまり、あまり興味が無かったのでしょう。誤解しないで下さい、その作品が、未完成で佳作でなかった訳ではないのです。私は彫る事に、その行動に強烈に感動したのだと考えます。彫刻なんぞに強烈に感動したのでは無いのです。あの汚れたシャツとキラキラ輝いた汗と斧の一振りごとに響く音に……中でも最も感動的に映ったものは、斧に打ち砕かれて、作者の顔や身体に乱れ飛ぶ木端だったのです。男らしい仕事だと思いました。

それ以来、木に取り付かれ斧でグサグサと彫った時代もありましたが、最近は斧で彫り通したいと思いながらいつもヤスリやノミで小綺麗にしてしまいます。十年も経つと少し器用になったんでしょう。しかし表現すると言う事と器用になると言う事は、雲泥の差です。彫刻を器用にまとめればまとめる程、完成したものには魂が入ってこないし、流れるのは濁った油汗ばかりです。ヤスリで擦りながら、一体、何を創っているのでしょうか。表面の一ミリや二ミリを気にしながら、一体、何を木に吹き込んだのか。気長に、ジメジメと一ミリ二ミリにこだわりながら、つながりやつじつまだけの世界との格闘です。鼻の穴や耳たぶ、上腕二頭筋、三頭筋……その器用なヤスリは、およそ自分の目の触れる、否、他人の目に触れるいかなる場所も逃さない厳しさで表面を撫でさすり、おずおずと動き回ります。その度に、にじみ出る油汗は、段々と彫刻から私を離していきます。あの廊下で見た、感動した彫刻。あの時出会った強烈で感動的な彫るという行動からです。

時々、斧を振って、力任せに木を打ち砕いた頃の作品を見る事があります。〝青春のモニュメント〟なんて、かっこいい題名のがありました。その当時、全く、私は、鼻高々でした。〝どうだ〟という気がありました。しかし、現在の細部にこだわる細心の目で見て見ると、非常に下手なのです。足の長さやつながりなんて、もうメチャクチャです。しかし、つくづく思います。「器用だなあー」と、何故なら、自分で言うのも変ですが、人間になっているし生き生きして、こだわりがなく、何よりもハツラツとして生命感があるんです。彫刻が立っているのではなく、その時の自分が立っているのです。

木を打ち砕く時、しっかりとした意識と削り取る限界点が見据えられ、見極められていたのです。今は、迷い惑い、弱気で、見えないので、表面を撫でさすり、蠢めくのです。

今、とてもやりたい事があります。それは、吹雪か雨の中で木を彫る事です。目や口に容赦なく入り込んで来る雨や雪つぶ、それを吐き飛ばしながら、体が飛ばされそうになり、体が震え、でも、それにも勝る汗が流れるでしょう。今度こそと思い彫り始めますが、老衰か体力の低下か、充実感が今一つ無いのです。芸術的一瞬という「ひらめき」が後から後から、わいてきて、斧でガツガツ彫れる、ミケランジェロなんか、ぐーっと近づいた感じの、木端の上でもグッスリ眠れる、行動に張りと活気のある昔にもどりたいです。

以前は、それ程、彫刻の事なんか真剣に考えたり努力していたか大いに疑問なのに生き生きとしたひらめきに満ちていて、何も知らぬ大胆さがありました。

やっぱり来たんだと思います。来るべきものが、自分の持っていた力の限界点がです。これからは、貯えなければどうにもならない所へ。その鍵は斧が握っているのだと思います。どう彫り進めたらいいのか、迷いだしたら、ヤスリで器用に撫でさすり始めたら、雪はねなんか、がむしゃらにやって、汗をかいたら彫り出すんです。ガツンガツンと、野蛮人になって、あの廊下で見た、自分の中の彫刻を取り戻す迄は。

今日も、うす暗いコンクリートの車庫の仕事場で、木と向い合ってそんな事考えています。

—全道展作家探訪(3)—

竹内　豊 会員

—必然的変容の中から—

後藤庸也

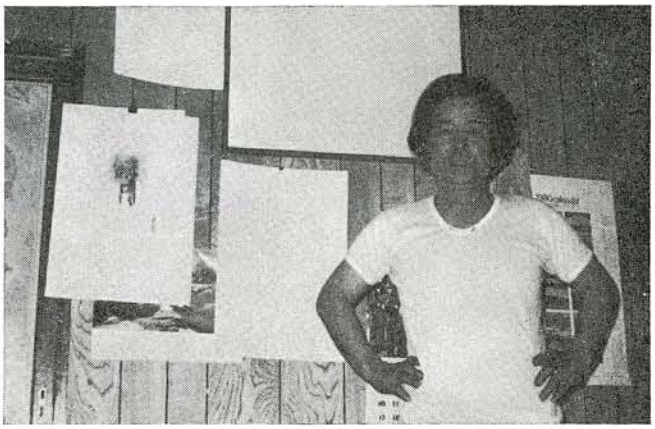
早春四月下旬というのに北国の気象は霙となりそれが雪と変わり札幌の郊外は白雪皚々それは清玲というよりも、みぞれ雪にけぶる風景は荒涼とした凄さの気配さえ感じた。

そんな日、竹内豊氏のアトリエを訪れた。

数少ない大正二桁生まれの戦中派として、みんながそうであるように彼も人間性を圧殺した不条理な軍隊の中に青春を過した経験をもつ、戦後三十年は過ぎ、風化しそうになった原体験が話の中に時として呪詛のように鮮烈に甦えってきて私を驚かせた。

そんな暗い青春の宿命を背負った彼の作品の軌跡を探るとき、暗い意識への報復であるかのように激情的な生命の燃焼をぶつけたような、また果敢に自己破壊を試みたようなアクションペンテングの長いアンフォルメルの時代があった。

黒褐色のモノクロムであるが、今、現に生きているという証の痕跡をとどめたような画面、石膏やコールタールを用いた独得の素材で行為から一切の様式化や形態化を否定し、必死に深層心理に迫ろうとした彼の心情を察知することができる。



アトリエで　竹内豊会員

——絵画はある出来事の再創造であって対象の図解であるべきではない。しかし対象との格闘がなければ、絵画に緊張はあり得ない。——ベーコン

彼は大変な含羞家であり、厭人的であり、寡黙である。且、内向的な人間の弱さを内蔵している。私は彼のことを「ガラスの神経」と言い続けている。美しいガラスの美術品のように繊細で脆弱で触れると毀れそうな傷つきやすい神経を持っている。

私はいつも朔太郎の「黒い風琴」の一節を思い浮かべるのである。

ああ、まっくろのながい着物をきて
しぜんに感情のしづまるまで
あなたは大きな黒い風琴をお弾きなさい
おそろしい黒暗の壁の中で
あなたは熱心に身をなげかける
あなた！
ああなんと激しく陰欝な感情の痙攣よ

また激しかったアクションペンテングの反作用として溢れるような激情が内面化への指向が始まった。

それは人間の形態の構造的な追求を通じて深層心理へ迫ろうとする幻想的レアリズムであり幻影を独得の現実感として表現し虚像と実像が重なりあい多様に展開させていく様式である。

それは思想を視覚像に置き換えて東洋的な深い奥行と透明な空間の構成によるもの、今までのアンフォルメルと違った異質

●全道展企画／札幌会員小品展／6月2日（月）～7日（土）／札幌大同ギャラリー，北3西3角
●第22回学生美術全道展／9月25日（木）～9月30日（火）／搬入，9月20日（土）札幌市民会館2F

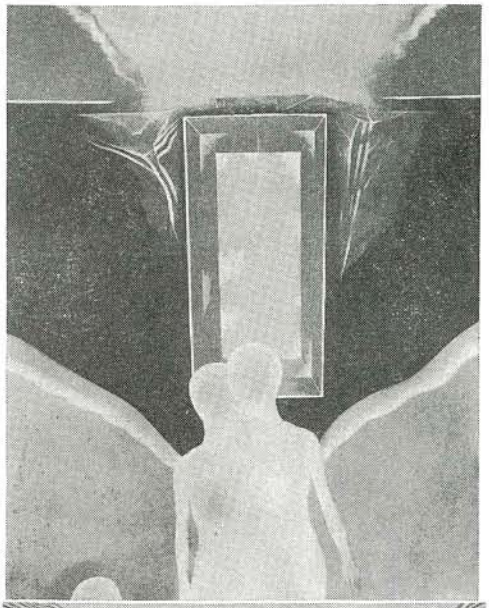
札幌時計台ギャラリー
—洋画材料専門の店—
OAK画材
札幌市中央区北1西3仲通
TEL 261—8971

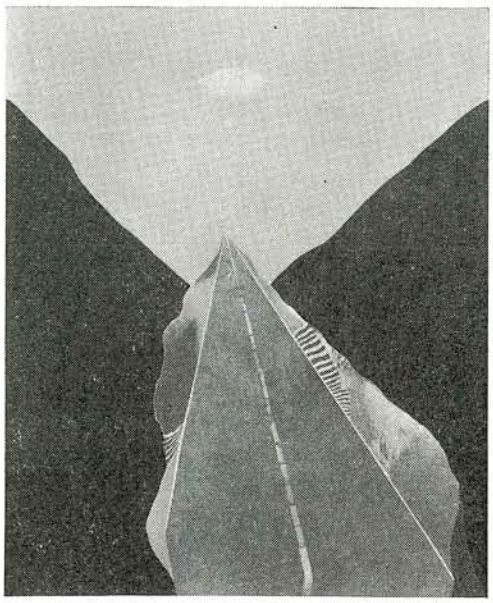
holbein アーチストピグメント
（ホルベイン専門家用顔料）
あなたの手で、油彩画、フレスコ画テンペラ、日本画、水彩等の古典画法を再現できます。
—詳しくは最寄りの画材店で—
ホルベイン工業株式会社
北海道地区総代理店㈱布川

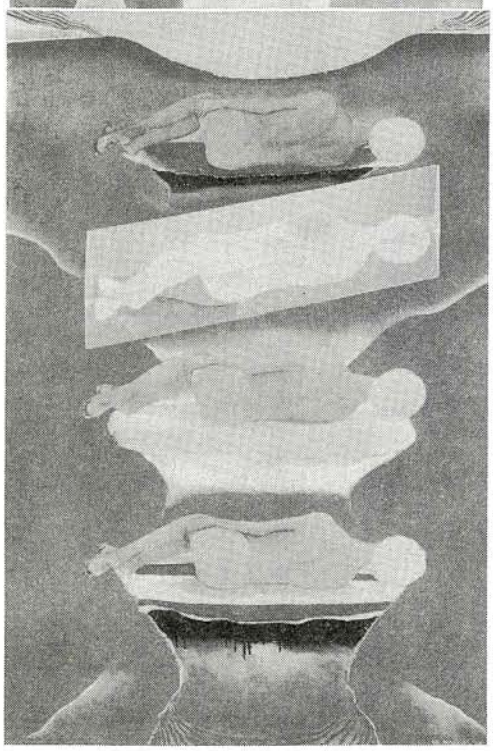
洋画材料
大丸藤井
セントラル
札幌・南1西3

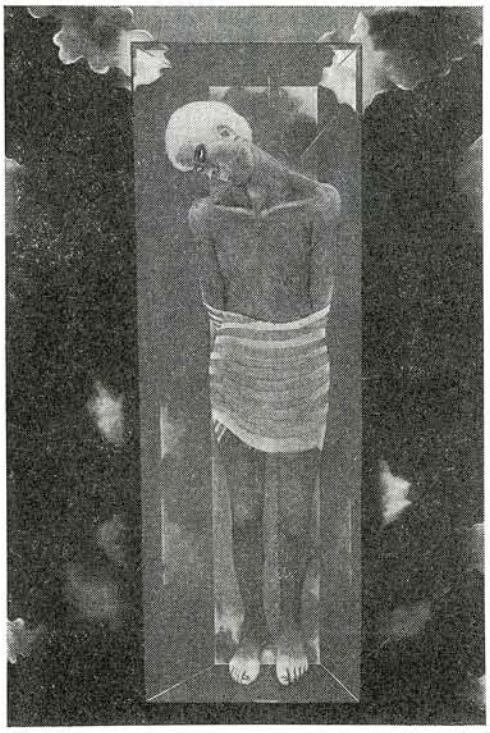
な造形要素としての純化がある。その画面の入念さ緻密さは根底から湧きでるイメージと相乗して魅力ある作品となり深い抒情となって伝わってくる。

彼のような戦中派人間が現代社会に適応しきれないで、この喧躁の世相の中から鋭い感性を駆使して、精神の焦操と弛緩と思索を繰りかえしながら、かたくななまでの主張をもって内なるものと対決し制作に挑んでいくときその自虐的とまで思える行為が彼の作品の深化に繋がる只一つの道程であるような予感がしてならないのである。









上 或る風景 1973年
下 ねむり 1973年

上 High way 1971年
下 ガラスの柩 1972年

●34回展より全道展出品規約の一部が改正され出品点数，大きさには制限はないが絵画作品のうち1点は必ず60号以下であること（1点出品の場合は60号以下）となりました。会友も準じます。

印刷の美を、私達は考えます。
中西印刷株式会社
札幌市東区東苗穂町505番地 ☎011(781)7501

三菱鉛筆

ぜんしんなデザイン
良心的な製品
株式会社 松山額縁店
札幌市狸小路5丁目 TEL(代)251－9000

全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし・全道展とわたし

札幌　武田　忠子

長い冬の重圧から開放され、すべてが芽をふき息吹く頃、私はその自然の変化する姿をまのあたりに見るいとまもなく、春は足早に私の前から去っていきます。近い将来、ぜひ旅に出て移り行く春の自然の感触を存分に味わいたいと切に願っています。

何年か前、図録の中で、〝バルチザンの目〟の随筆を読み、私はその生き方に深く感銘しました。生活すべての中でするどい感覚をもち、没入し、心と行為が一体化する努力を惜しまない人達、そんな作家のいる全道展に、本当の人間存在を感じると共に、求め続ける真しな態度にふれ、作品の前では一層の感動をおぼえます。

その都度、私は意識を新たに、学び得ることの大きさを抱きながら自己を見つめます。

描き続けることは自分とのたたかいであると教えて下さった師の言葉が、今実感として迫ってきます。道は遠くても、私の得た感動を大切にし、さらに制作意欲を燃やし、好きな道を探求していきたいと思っています。

苫小牧　佐藤　公毅

私が彫刻を始めたのは道学芸大学岩見沢分校に入ってからでした。三年目になって彫塑研究室（小川清彦先生）ができ、私はそこの一期生となったわけです。デッサンなどで砂田友治先生のご指導を受けたり、集中講義で本田明二先生に教えをいただいたりで、必然的に私の発表の場が全道展へ向いていったわけです。落選という憂目にも何度かあいましたが、ありがたいことに、その時には全道展の諸先輩は実に暖かく活力と自信を私に与えてくれたことです。また、年一回の全道展出品へといざなうものとして、岩見沢彫塑室一期生としてのプライド(?)があるようです。後輩諸君の活躍を見るにつけても、力の差は歴然としているわけですが、制作するという点での共通する行為は今後も続けていきたいと思います。そのことが私にとっては世間の付き合いから離れた、まったくの私的な世界であるからです。周りの人々に感謝しつつ……。

旭川　秋田　清陶

私が陶芸を始めた十四、五年前全道展に応募すると言ったら笑われるのがオチでした。

入選する事は、〝夢のまた夢〟ですから、初入選の時は、竹ざおで、月でも落したような喜びだったのを忘れる事は出来ません。陶芸の場合は農業と同じで、先輩の忠告を守って行く事が、一番大切な事だと思っています。あとは努力と研究でしょう。

公募展を、嫌う人もいるけれども、芸術をめざす人のはげみの場であり、自分を省みるよき機会として、私は絶対必要だと思います。

最近は、展覧会の為に、作品がどんどん大きなものになって来て小さなたとえば、茶道具の様なものが、出品されないのはどうしてなのかと考えています。

この頃は、私の窯場も、灯油の匂いが泌み込み、すすのよごれが一段とひどくなって、気になるようになって来ました。

函館　加藤　博

雨上りといえば大低の人は私を知っていてくれる。本当に有難い事である。知っていてくれた人達もそうであるが、空模様にも感謝している。私は雨に濡れた樹木や建物の色合いが好きである。静かに降る雨は少しずつ木の幹や建物の上の方から色こく変えてくる。

樹木であれば、葉のない時期、建物であれば、三角屋根よりもビルデングがいい。全部濡れ切ってしまうよりもいい感じの時がある。

強い雨の時は路面も瞬く間に濡れてしまう。一頻り降ってから嘘のように晴れ、陽が射し、路面が濡れて建物が写し出されれば画になる。

空の中の建物、地の中の建物、光と影、日向と日陰、陰中の明暗よく見ると様々なものが見える。

様々なものが見えなければ画にならない、兎も角どんな事をしても様々なものを見なければ画にならない。どんな事をしても見えるようになるにはデッサンが必要である。本物と較べ本物よりも本物らしく描くにはよく見ることである。見えないけれども本物らしく描いているうちに見えてくるのである。結局は絵空事である。もともと本当のことは嘘の中にあるのだから、嘘が描けるようにならなければ会員になれないのである。

可成り強い雨の日に全道展の懇親会があった、私も酒は好きなほうだから一応の報告挨拶が終れば酒宴となるので神妙に酒待ちである。

気になってはいたが、案の定電話がきた。雨上りで賞をもらった時は濡れた路面が輝いて見えたがそれ以後は空模様が恨めしくなった。今は小高い所に家を持ったので、もう一度空模様に感謝するよう頑張りたいものである。

奈良　嶋守　哲夫

奈良に住み二年が過ぎました。エネルギッシュな北海道から歴史がそのまま静かに生きづく古都奈良。そこで見る日常の空間は道産子である私には新鮮に思えます。

昨年、初めて興福寺南大門跡の「薪能」を見たときの嵐のように襲いかかった感動は、自分が曽つて彫刻の世界を発見した時の、まさに息がとまるようなものでした。

幽玄の世界におりなされる静と動の世界は、まったく異質の空間を造り出し動きが静であり静が動きであるような錯覚を覚え、さらに道端でひっそりと呼吸する朽ちた石仏たちの時間性と、自分が探し求める彫刻の空間とも折り重なり、混沌の内に何か新しいものを発見したようでした。その発見がどういう形で作品に生かせるか……そうは問屋がおろさない所にもまた生甲斐のある仕事です。裸電球の下、一升瓶がゴロゴロ溜るゆえんでしょう。木と出会い、石と出会い、今年もまた全道展に日々のたよりを石彫にこめて送りたいと思います。

札幌　艾沢　詳子

私の創作活動は物心ついたころから始まったようです。

紙人形から始まり、ノートや教科書の落書、木片を使ってのレリーフ、針金でジャコメッティ風の人体をマネて作ってみたり…絵を描こうと意識してからは、油絵、彫塑、デザイン等手当り次第に試みてきたようです。

今はモノクロムの世界を、銅版画に置き換えて表現する仕事に夢中になっています。会に出品するまでは絵作りと言うのがわからずただ創るのが楽しいと雰囲気に溺れていましたが、出品回数も重なるにつれて、真剣に「美術における表現とは何か」自分は何を表現すべきかと考えるようになりました。

まだまだ表現したいものはつかめないでいますが、私自身の感動や印象を記録し、発表することによって観る人と作品を通して共有できる作品を、作りたいと思っています。

意見・質問・感想・ETC

●「作品2点以上出品のうち、60号以下を1枚必ず入れる」。このことに対してひと言申しあげたいのです。作家ひとそれぞれ自分の制作しやずい号数があると思うのですが、なぜ60号という号数でその号数以下を1点加えなければならないのでしょうか？ 例えば120号以上を中心に制作している作家にしてみれば上記の制限は重荷になり圧力がかけられます。それと、私個人としては120号を中心に制作しているのですが、出品した作品になさけをかけられたくないのです。80号以上の作品を出品して落選、選外となればそれでもかまわないのです。私としては公募展であるかぎり選外はつきものですし、質の上では向上すると思います。(質ということばは問題あると思いますが)、私個人としては自己最高の作品を出品して選外となってもかまいません。　旭川・寺原　悟

● ZENの編集はうまいです。新味があります。担当者のご苦労に感謝しております。　東京・田中忠雄

● 市民ギャラリー完成の時、全道展の会期を固定してほしい。その時、中央での各展覧会との会期を充分考慮して是非お願いします。　札幌・原　義行

● ZEN、毎号面白く拝見しています。　小樽・千葉七郎

● ZEN、№3まで、すみからすみまでたのしく、或はまちどおしく読ませていただき、会員会友諸氏のたよりがあって、とても身近かに感じながら読んでいます。34回全道展の作品評もなかなか好評と存じます。ZENのバックナンバー有料にして入手できればと思っているのですが。　歌志内・森谷　一

● 先般、全道展事務局長渡会氏来函の際、打合せその他諸々について充分話し合いできました。竹内氏は永い間本当にご苦労さまでした。今後共連絡を密にしましょう。　函館・長谷川常雄

● ZEN編集委員のみなさまご苦労さまです。自由闊達な新企画をお願いします。　札幌・玉村拓也

● 全道展会期について、初出品の頃は6月中で、時期的にうららかな頃、この印象が強く、盛夏中の全道展は気分的によくない、諸々の問題がある事は判るのですが委員の方々の協力をお願いしたい。春の会期で、夏は少し遊びたいからかな？　歌志内・本城義雄

● いつも名前が不正確、秋山渉走武、渉＝誤、沙＝正です。大変気になるものです。　函館・秋山沙走武

● ZEN、たのしみにしています。　札幌・小関恵久子

● 身辺はつまらない情報の渦で埋没しそうだが、ZENの情報は孤独な仕事をしている自分の心をかきたててくれる、2ケ月に1回くらいの割りで発行できないものだろうか。　伊達・野本　醇

● 誰もがどんどん活ぱつな意見を出し、もっと頑固に主張すべきです。日本人は、ややダキョーが多すぎて、むしろ自分に対しても不誠実であるかと自省しています。　東京・松島正幸

● 全道展の会友展に出品できないのが残念でした。今年も企画して下さい。　札幌・福岡幸一

● 小生まだまだ未熟な者ですが、全道展の目録にぜひ入選した人も作品と名前をのせてほしいです。やはり記念の入選作品ですので、続けて下さい。　札幌・花田正雄

● 登別地区展ができる様になりまして感謝しております。不勉強深く自己反省をしております。　登別・諏訪英雄

● 35周年記念展開催日の通知を手にして、第1回展入選の感激が昨日のように想われ、月日のたつのは速いなあとつくづく思う。しかし、あせらずに身体の動く限り描き続けたい。35周年記念展の内容のある展覧会を期待している。　札幌・池田正之助

● ZEN、興味深くいつも読んでいます。企画のユニークさに魅力を感じます。
　全道展、うーん、いろいろあるけど、60号以下の作品の義務づけ(これは壁面上仕方ないけど)と、会期が一定でないこと、これはどうにかならないものかと思います。　札幌・堀川　勉

● 伏木田論文の波紋――私は初めて全道展機関紙№3を手にした。機関紙掲載文で鵜川五郎氏の『伏木田論文への反駁』を読み、今さら芸術礎石論が産まれる環境、背景の理解に苦しむ、イヤ、苦難に満ちた創設期を過ぎ、啓蒙期より安定期へ、そして高揚期を迎えた現在だから会員、会友研鑚論議の警鐘としてか。
　郭から見て全道展運営への投石波紋が大きく渦となり得る要因が潜在し、背定、否定両論で何か感情の高ぶりを秘めている状況を感じる。この波紋は自然現象発生の現象経過に於ける自然消滅にならず、飛躍指向のステップとしての勇躍論争となるなら大いに歓迎されるべきものであるが、誹謗攻撃なら危機的状態に追いやられない。一般的傾向としても、発展拡大の歴史の歩みの中では内部歪、派生の増幅が見られ、その処理はホットに論じ、クールな智が望まれる。
　機関紙№3に寄せられている郭からの声で、「機関紙の上で諸先生の言葉に触れることができるという事はとても大きな励みになります……」と、述べられているが、この響きは、全道展運営を郭から純粋に眺める美、芸術志向者の絶対的信頼の響声音である。
　さて、愚見ですが、『北方的表現主義』の趣意には、広義と狭義の解釈のゾーンがあるものと考える。そのゾーンのとらえ方により論点が大きく違うものであろう。両氏は客観的視野よりゾーンを定め、肯定、否定論を述べられておる事であろうが、全道展運営趨向への軌道修正論なら態勢批判としてソフトに受け止められるが、固有名詞を上げての事象指摘なら、正確な実証根拠を明確にすべきである。でなければそれは不確実論理の展開であり、個人の名誉と、個人の美、芸術性の否定であり嘲笑的侮護である。非礼誠に窮わまりない事になる。唯、美、芸術界に於ける正確な実証根拠(客観性)は主観の中の客観であり、個人の育成環境等により、極めてむづかしい側面を持っているのも又、事実である。
　両氏の帰結される美・芸術論の合致点は確認されながら、その過程における落差の大きい現代確認差位論は、吾々一般の美・芸術志向者にとっても大きく関与され、無関心では居られぬ重大な問題提起である。内部論争は全体活動を停滞より覚醒へ促し、発展賢策の英知を産むが、内部抗争は収拾し難い醜態余韻を残し分裂を示唆、会は衰退、壊滅への愚策の道の模索に等しい。
　私は全道展の発展を願うが故に、会運営の中枢機関、並びに会員、会友各位の慎重かつ速やかなるコンセンサスを望むのである。　小樽・立川岩治

消息

● 本郷新氏が亡くなり、倒れた樹を見て今更の如く大木であったことを思い知らされた感です。　東京・佐藤忠良

● 台湾の友人や、九州の画友から旅行案内の東とともに遊びにこいと言うので手持ちのパスポートが使えるうちにと思い画嚢が果して満腹になるかどうか、南国の風物に触れてみたいと思っております。　室蘭・熊谷善正

● 本郷新君の次男の惇君が訪ねてこられました。私の長男と自由学園時代のクラス仲間で、本郷新君の家庭の話をいろいろききました。私はこの4月5月ちょっとヨーロッパに行ってきたいと思っていますがまだ本決りでありません。　東京・田中忠雄

● 至って壮健です。　小樽・森本三郎

● 創作集団「派」(わかれ)では、派文化会館の設立と同時に、派ギャラリーを開設した。同集団は今年7年目に至り、同人誌も5号記念号を発刊するに至った。広い芸術ジャンルに挑戦する集団として全道展の皆様の応援を期待する。　室蘭・栗橋ノリオ

● 5月16日より2週間の予定で中国訪問、北京中央美術学院にて木版画の講習会を5日間開催、同時に個展。　東京・北岡文雄

● 今年は庭の隅に小さなアトリエ建築予定　札幌・寺崎源治

● 4月の第7回新叢会展(新宿・ギャルリー・アルカン、シエル主催)の作品、小品ながら3点の制作に苦労しています。　札幌・原　義行

● 目下、個展、国展の制作で多忙を極めております。今年の全道展こそ頑張り恥しくない作品を出したいと思っていますが……。　東京・菅野充造

● 全道展の活躍を期待しています。今年は何とか出品したいと思っております。3月17日より28日まで、新橋の第七画廊で「陶によりオブジエ展」があり出品していました。　東京・難波田龍起

● 全道展函館支部は、事務局がこの度三箇三郎氏より折原久左エ門氏にバトンタッチされ、会計並に補佐は私が引き続き担当、よろしくい願ます。　函館・長谷川常雄

● 4月より札幌にUターンしました。　札幌・後藤庸也

● 瀬戸君が近くに居を定めた。時々会っています。同君、大いに張切って制作しています。　函館・池谷虎一

● 全道展出品者の中橋修君が3月中旬大同ギャラリーでパステル画を発表しました。全道展もパステル画の新人の出現を期待したいものです。　札幌・玉村拓也

● 10年間住みなれた東京を離れ、栃木県の山の中、那須へ移転しました。総て初心に返って勉強したい所存です。　那須・田崎謙一

● 今年も素晴らしい全道展が開かれる事を心よりお祈り致しております。私もマイペースでやってみるつもりです。作品の上で、いつも新鮮なる感覚を与えてくださった良き友でありライバルであった大豆生田博子さんが東京へ転出してしまうそうで、とてもさびしく思っているこの頃です。　札幌・伊藤啓子

● 32年11ケ月の勤めを定年退職し、目下生活設計の建て直しに必死です。　苫小牧・鈴木善公

● 8月札幌個展の予定ですので今年は審査にも出席できます。よろしくお願い致します。　東京・小川洋子

● 10月、時計台ギャラリー17年ぶりの個展で100号を中心に25点程展示したい。全道展の皆さまのご批評いただければ幸いである。　歌志内・本城義雄

● 3月20日より札幌に転居し、はりきって制作に励んでいます。　札幌・川本ヤスヒロ

● からだと相談し乍ら制作しています。今のところ、50号程度です。創元展出品作を送り、今、「巨桐の実り」を完成し一息ついています。昨秋は今まで見たことのない桐をみました。50号ですが楽しい労作でした。最近はバス、車と乗りついで出掛けています。　函館・東　政雄

● 最近〝マックス・エルンスト、その真髄〟The Essential Max Ernst という独文からの英訳を勉強中です。
　エルンストの日本画壇への影響は予想以上に大きいと思っています。小牧源太郎先生の日本的消化の仕方に、消化法の一つの典型をみています。道内では小川原脩先生の初期の作品、ここらをふまえてエルンストの日本的消化について論稿をくわだてているところです。いささか気になるのですが、"The Essential Max Ernst"のほんの10頁までの所でニーチエ、フロイド等との関係が記述されていますが、みずゑ特集(80年2月号)もニーチエ等の写真を掲載して上記の記述とほぼ同じ内容の記事としています。英文の書物の前半10頁たらずの所を参考に、簡単に、特集をつくり上げているようで、いささかがっかり、もっとも、花田清輝のギリシヤ、ローマにまたがる

知識もそのネタはフロイドの著書の註であったそうで、そんなものかなと思っているところです。　浦河・山下脩馬

●年老いた母に、留守番も今年くらいだから、行くなら今の中と言われ、イスタンブール、カツパドキヤをまわってエーゲ海への一人旅に出かけることになりました。行く前にあれもこれもと気負って疲れてしまい、身体の調子を悪くして旅も一時はあきらめましたが、日が迫るとやっと元気になり明後日出かけてきます。帰ったら、旅疲れとか旅ボケ等と言ってはいられない、腰をすえて描かなくてはと自分に言いきかせています。

札幌・小関恵久子

●先日、安井賞展のオープニングパーティで岸本氏とひよっこり逢って、あまり知り合いのない僕はとても嬉しかった。

田中忠雄氏もすこぶるお元気だったし、主体展の寺田政明氏も、小樽の運河問題について心痛されていた。

伊達・野本　醇

●どういうわけか、全道展の会員、或は会友との交際が殆んどありません。不徳の至すところと言うのでしょうね。

小樽・鈴木　伝

●最近、滞仏の期間が永くなり、皆さんにもお会いできず、全道展にも出席せずに申訳なく思っています。いづれ、ゆっくりと、フランスやイタリー等の現代画壇についての私の感想もお話しする機会があろうかと思っています。日本を離れると日本がよくわかるものです。皆さんのご健康とご健闘を祈ります。4月に又出かけます。　東京・松島正幸

●私事で失礼ですが、私の父、砂田友治は最近元気を回復致しました。ご心配おかけしました。　札幌・砂田陽子

●小生、自宅療養中ですが、体重も41キロに回復、絵筆もとれるようになり、55・3・31付で38年の教員生活を退職、富川から約5K入った牧場地帯に小さなアトリエを建てました。きれいな空気を吸いながら、これからモリモリ描きたいと思っております。平取・大友一夫

●今までどおり背伸びしないで、一作一作ごとぶつけることのできる仕事がしたいと思っています。なかなか考えているように表現できませんが、自然に作品ができたらどんなに素晴らしいか、想像するだけで楽しい気分になります。

室蘭・大高　操

●住所が変わり、慣れるのに時間がかかっています。(昨年12・20引越)、自分のアトリエも出来、頑張らなくてはと心にきざんでいます。頑張ってよい作品をつくります。　札幌・福岡幸一

●アフガニスタンの友人の事ですが、主都がプールよりかなり奥地に住む女達は仔羊を抱いて寝る等、想像も出来ない光景でしたが、糞とか乳の匂いと言うか私は身近かに経験したのですが、あの人の消息が印度の友人から東京の知人を介して最近判明しました。よくモデルになってくれた廿歳のマルカさんは、印度に所用に行き、難を逃れ、ガブールの病院に行った母は凶弾に倒れました。子供の様に育てた仔羊を、買人に売る時の悲しい顔を想い出し、土の家屋の中に残された仔羊達が哀れでなりません。

札幌・西村貴久子

●いつつか71歳の年寄りになってしまったので、どこへ出ることもなく毎日アトリエで下手な絵を制作している。来年こそは、来年こそはと毎年がんばるのだが、やっぱり今年もだめかとガッカリすることの連続である。又、来年もがんばるつもり。　函館・天野宮蔵

●2月24日より4月7日まで、スペイン美術賞展参観使節団に参加して、スペイン駆け足旅行をしました。

札幌・坂原チエ

●目下患者殺到で悲鳴、個展をひらきたいのですが今年は引越しを予定しているので無理なようです。

苫小牧・浅野武彦

●不覚にも永い病臥になりました。会からのお見舞いありがたく、こころから感謝いたしております。おかげさまでこのところようやく健康をとりもどしつつあります。雪がとけたら徐々に足を馴らしそのうち颯爽と街へ出かけたく思います。紙上を借りてお礼申し上げます。

札幌・一木万寿三

●やっとコラージュという長いトンネルから脱け出て、人物画に戻れる気持ちになりました。絵はデッサンの力にあることをかみしめつつ、ヒトを確かな目でつかみ切れることを願いつつ時が無情に過ぎて行くのをうらみつつ、そして絵とは自分にとって何かと自問しつつ、雑多な日常性の中にのめりこみつつ……毎日が確実にすぎて行くのです。

札幌・堀川　勉

●故国井澄会員ご息女より転居通知がありました。

新住所、〒061(21)札幌市南区澄川6条3丁目、公団住地澄川団地9～106、T011(812)4014、遠藤源四郎方、地下鉄澄川駅東口より西岡方面へ徒歩で15分位で左側へ曲り西岡生協の真向い9号棟の1階の角です。何時も何かと会の皆様にはお世話になって居ります。おついでの折よろしくお伝えください。国井篤子(ソフィア中村)

●札幌に落ちついております。

札幌　八木保次

●病気やや快方と思われます。お見舞いまことに有難うございます。

札幌・砂田友治

●鳴海アツ会員、現代工芸展で会員賞受賞されました。

個展案内

●森谷一小品展　砂川市十字街 ミほしミ
4月1日(火)～6月1日(日)
●千葉幸子個展　時計台ギャラリー(C)
5月5日(月)～10日(土)
●佐藤忠良展　十和田市，5月
●浅川茂個展　帯広市民会館
5月2日(金)～8日(木)
●熊谷善正個展　札幌エルム画廊
5月8日(木)～17日(土)
函館ギャラリー
5月27日(火)～6月1日(日)
●鵜川五郎個展　札幌時計台ギャラリー
5月19日(月)～24日(土)
函館和光デパート
6月19日(木)～24日(火)
●千葉七郎版画展　時計台ギャラリー
5月26日(月)～31日(土)
●栗橋ノリオ個展　札幌大同ギャラリー
5月26日(月)～31日(土)
●中江紀洋木彫展　釧路市民文化会館
6月1日(日)～10日(火)
●瀬戸英樹個展　札幌時計台ギャラリー
6月9日(月)～14日(土)
●小島真佐吉個展　北見まるいいとう
6月12日(木)～17日(火)
札幌パークホテルギャラリー
7月1日(火)～7日(月)
●手島圭三郎個展　時計台ギャラリー
6月23日(月)～28日(土)
●永井みよ子銅版画個展
札幌大同ギャラリー
6月23日(月)～28日(土)
●北岡文雄個展・北海道シリーズ
旭川梅鳳堂画廊
6月30日(月)～7月13日(日)
●川本ヤスヒロ個展　時計台ギャラリー
7月7日(月)～12日(土)
●長谷川忠男個展
札幌パークホテルギャラリー
7月8日(火)～14日(月)
●高野政志個展　札幌大丸ギャラリー
7月14日(月)～20日(日)
函館棒二デパート
9月16日(火)～21日(日)
●八木保次展　札幌大同ギャラリー4F
7月14日(月)～19日(土)
●八木伸子展　札幌大同ギャラリー3F
7月14日(月)～19日(土)
●秋山沙走武彫刻展　札幌エルム画廊
7月中旬
●徳丸滋個展　時計台ギャラリー(A)
7月21日(月)～26日(土)
●渡辺真利個展　函館㊫今井，7月下旬
●福井正治個展　苫小牧画廊　7～8月
●穂井田日出麿油絵個展
札幌大丸3Fギャラリー
8月12日(火)～17日(日)
●羽山欣周個展・釧路㊫鶴屋
珈琲店ジャルダン
8月6日(水)～11日(月)
●小川洋子個展
札幌アートギャラリーさいとう
8月14日(木)～19日(火)
●工藤善蔵油絵個展
札幌時計台ギャラリー(A・B)
8月25日(月)～30日(土)
●遠藤ミマン個展　時計台ギャラリーA
9月8日(月)～13日(土)
●小川原脩個展　銀座文春画廊
9月29日(月)10月4日(土)
札幌時計台ギャラリー
10日13日(月)～18日(土)
●本城義雄個展　札幌時計台ギャラリー
10月13日(月)～18日(土)
●米沢邦子個展　札幌時計台ギャラリー
10月13日(月)～18日(土)
●渡会純价個展　浜松市由美画廊
10月16日(木)～23日(木)
●松島正幸個展　銀座資生堂画廊
10月中旬
●鈴木伝個展　小樽展　11月
札幌展　2月
●岸本裕躬個展
札幌時計台ギャラリー(A・B)
10月23日(月)～11月1日(土)
●竹岡羊子個展
福岡東亜画廊(A・B)
10月27日(月)～11月2日(日)

お知らせ

●全道展企画「全道展札幌会員小品展」は、6月2日(月)～7日(土)札幌市中央区北3西3大同ギャラリーでひらかれます。

●会員、会友、出品者、住所変更のあったときは速やかに事務局まで連絡ください。

●第33回、第34回全道展図録をご希望の方には送料協会負担でお送りします。申し込みは全道展事務局(061(21)札幌市南区澄川6条12丁目渡会純价方)まで、第33回展700円、第34回展1000円。

●ZEN・図録編集委員が次のようにきまりました。伊藤寿朗、岸本裕躬、佐藤靖、斎藤洪人、坂口清一、山口惣市。なお図録には会員、会友作品、全入選作品を収録します。ご期待下さい。

募集

●全道展機関紙「ZEN」は年二回刊行の予定ですが、全道展および「ZEN」に対するご意見、ご希望、ご質問、ご感想などみなさまからの声をお待ちしております。連絡および送付先は全道展事務局まで。

全道展に関するお問い合わせは次のところへ。
・全道展事務局／061(21)札幌市南区澄川6条12丁目　渡会純价方
T011(581)2528
・北海道新聞社事業局文化部全道展係／060(91)札幌市中央区大通西三、T011(221)2111
×　×
会員、会友で会費未納の方は早急に納入して下さい。
郵便振替口座、小樽86617、嵐玲子方、全道美術協会宛。